聖霊降臨後第１６主日（特定１９）　「赦し」ということ　　２０２３．９．１７．

私が宮崎に来る前の年、２０１５年に、長田弘という、福島出身の詩人で児童文学者が亡くなりました。この人は、長く NHK の視点論点、という番組で、エッセイのようなお話を１年に何回かしていました。そして１０年前に、岩波新書（赤の１４１４番）ですが「なつかしい時間」というタイトルにまとめて、出版しています。

私がこの人の話を初めて聞いたのは、今から１５年前、２００８年の９月１１日でした。その時のお話のタイトルは、「死者と語らう」というテーマでした。約１０分間の話でしたが、大変興味深く見ました。その放送の話も、この本の中に入っていたので、改めて読んだりしているのですが。

１５年前、テレビでそのタイトル「死者と語らう」というのを見て、「死んだ人と、どのように話をするのか、まさか霊媒師のような話ではないだろう、」と思って聞いていますと、彼は、以前親しくしていた人で、今は亡くなった人との、思い出の場所。彼の場合は、京都河原町三条の交差点に行って、しばらくそこに立っていると、以前親しくしていた人と出会えるような経験をするので、時々そこに行く、と言うのです。

そして、そのような特定の場所というのが、それぞれ、わたしたちみんなにはあって、そこで、以前生きていた人のことを思う時、何か自分に語りかけてくれるようなものがある。それが、墓だったり、海だったり、お祭りだったり、あるいはその人が書いた本だったりすることもある。

長田さんが言うには、
人間は、自分が書き残しているかどうかは別にして、みんな死んだ人は、この世に本を残している。「本」という漢字は、木の根に近い所を指すということで、木の下のほうに一本横線を引くのですが、「おおもと」「始まり」とか言うように、規範となるもの、主たるもの、本来的なものなどを指す言葉らしい。私たちは、特定の場所に行くと、その人の本を読むことになる、と言うのです。そして、亡くなった人から、私たちは多くのことを聞く時、現在の自分が変えられるような体験をする。そして、この人が締めくくりに、何度も言って印象に残った言葉が「よく生きた人の言葉は死なない」というものでした。

私は、「人間はみんな死ぬ時に、１冊の本を残す。」ということ、そして「よく生きた人の言葉は死なない」ということが、大変心に残りました。

というのは、アフリカの諺に、（以前国連アナン事務総長が開会スピーチで紹介した）「アフリカでは、一人の老人が死ぬと一つの図書館がなくなる」というのがありました。死んだら本を残す、というのと、死んだら図書館がなくなる、というのは、まるで逆の話のようですが、人間の存在を本にたとえるのは、同じことを言っているようにも思えました。

そして、もうひとつは、マタイ２４：３５「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」というイエス様の言葉を思い出したから印象的でした。

ここまで、長い導入の話をしましたが、それは、今日読んだ、旧約聖書続編、シラ書（ベン・シラの知恵、とか集会の書とか言われている書物）のことを言いたかったのです。

イエス様が生まれる１９０年くらい前、イスラエルの都エルサレムに、「シラ・エレアザルの子，エルサレムに住むイエスス」という人がいました。学者の彼は各地を旅行し、学校を開いて子どもたちを教えたのですが、地中海沿岸のギリシャ・ローマの思想、ヘレニズムの文化に影響されてしまう若い世代に、自分たちヘブライズム、ユダヤの思想を伝えようとして書いたのが、このシラ書です。そしてその後、約６０年くらいして、紀元前１３２年、このイエススの孫がエジプトで、それをギリシャ語に訳しました。その時の翻訳の苦労を、シラ書の１章が始まる前に「序言」として書いています。

聖公会では、聖書と言えば、他のプロテスタント教会と同様に、旧約３９巻と新約２７巻合わせて６６巻を聖書の正典としていて、聖書は「救いに必要なすべての事柄を載せている。」と定義しています。

ところが、カトリックにも気を遣っているのか、現在旧約続編と言われて、新共同訳に載せられている書物も礼拝で読みます。これについては、イギリスの三十九箇条という聖公会の立場を述べた文章では、「生活上の規範と道徳上の教訓のために読むが、それらを根拠としてどのような教義をも定めることはしない。」という主張をして、信仰の指針にしているわけです。

私はこのシラ書を読んで感心してしまいました。今日の福音書でイエス様が話されたたとえ話を、それが語られる２００年も前に、エルサレムに住んでいた、シラ・エレアザルの子、イエススが、ほぼ同じような内容で書き記し、言い当てているように思えたのです。

今日の福音書は、弟子のペトロが、「兄弟が罪を犯した場合、何回赦すべきか。」という質問をします。それに対して、イエス様は、ペトロの言う７回を７０倍するまで、と答えておられます。これは、「４９０回まではいいが、４９１回目はダメだよ。『これで何回目だ』」というふうに数えるのではなく、無制限に赦しなさい、という意味です。というのは、その後で話されたたとえ話では、もはや赦す回数の話にはなっていないのです。

金額こそ、１万タラントンと１００デナリオンという差があります。王様が家来の借金を帳消しにした額が、約６０００億円であるのに対して、１００万円という程度差があります。しかし、このたとえ話で、イエス様は、「何回、どこまで赦したらいいのか」という、問題ではなく、「なぜ赦さなければならないのか」ということを問題にしておられるのです。１万タラントンと１００デナリオンでは、６千万倍の差があります。これは、私たち人間が、自分の力では、到底働いても返せないぐらい、大変な負い目を神様から赦していただいている。だから、私たちも、仲間の罪を赦してやるのは、あたりまえじゃないか。６０００万分の１なんだぞ、と言われているのです。

今日のシラ書は、小見出しが「憤り」となっていて、２節から５節まで、各節は、すべて私と隣人、私と神様の関係を対比して、隣人の罪を赦さなければ、私自身も神様から赦されない、そんな今日のたとえ話と同じことを何回も語っています。ただ、しかし、それなら私たちがすんなり、隣人の罪を赦せるか、ということになれば、そうはいかない、現実の問題があります。

新型コロナウイルスの流行は、私たちの人間関係に大変よくないお互いへの警戒感を与えてしまいました。マスクを着けていないことへの批判、感染者の多い所から帰省していた人への誹謗のチラシなど。そして、ＳＮＳなどで、有名人への批判が起こって、自殺者を出してしまう、という現実です。本来闘わなければならないのは、コロナウイルスなのに、私たちは、多くの人の行動とは違った行動をとる人に「同調圧力」と言って、「多数の人々と同じようにしなければならない」という圧力をかけて、少数者を悪者にしてしまうのです。そして、自分を「正義の味方」のように思って、「〇〇警察」という言葉も流行りました。

私たちクリスチャンはその場合、少数者の立場に立つように教えられていますが、そのような立場に立てない人を「赦せない」と思ってしまう。しかし両者はどちらも被害者である、という認識を持つ必要があると思うのです。

もちろん、ここにイエス様がおられたら、私たちに向かい、手に石を持って、「お前たちの中で、罪のない者が最初に石を投げろ。」と言って、怒りを抑えるように促されると思います。

しかし、私たちが、人を傷つけて罪を犯した人に対して、赦すことができるとしたら、それは「人にはできないが、神にはできる。」という、恵みと申しましょうか、神様からの力が働いた時に、初めてできることではないか、と思うのです。

今日の、イエス様より２００年前に活動していた、エルサレムのイエスス君は、今日のシラ書の最後に、「掟を忘れず、隣人に対して怒りを抱くな、いと高き方の契約を忘れず、他人のおちどには寛容であれ。」と書き残しています。

「他人のおちどには寛容であれ」

これは、厳密に言えば、聖書の言葉ではありませんが、「よく生きた人の言葉は死なない。」と詩人の長田さんが言うように、イエススの経験の中で、私たちに伝える言葉として、今も示されているように思えます。

この寛容さを私たちが身につけてゆく中で、少しずつ、他人の罪を赦せるものになってゆけるのではないか、と私は思うのです。